羆嵐

くまあらし

吉村昭

羆嵐

くまあらし

吉村昭

熊嵐（くまあらし）

昭和五二年五月二〇日発行
昭和五二年八月二五日五刷

定価九〇〇円

著者　吉村昭（よしむらあきら）
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一　電話　業務部（〇三）二六六一五一一一　編集部（〇三）二六六一五四一一　郵便番号一六二一　振替　東京四一八〇八
印刷所　東洋印刷株式会社
製本所　神田加藤製本

© Akira Yoshimura 1977 Printed in Japan
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

羆（くま）

嵐（あらし）

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

一

大正三年夏に勃発した第一次世界大戦は短期間に終了することが予想されていたが、戦火は急速に拡大し、日本も日英同盟にもとづいて参戦、ドイツの租借地である青島（チンタオ）に兵を派して攻略した。

翌年に入っても戦争終結の気配はなく、戦争による経済混乱がヨーロッパ諸国を呻吟させていた。ヨーロッパの主戦場から遠くはなれた日本の経済も、輸出の停滞と輸入品不足に悩み、深刻な不況にさらされていた。

しかし、その年の夏頃からロシア、イギリスに対する軍需品の輸出量が上昇し、アメリカへの生糸を中心とした商品の輸出もいちじるしく増加しはじめ、日本経済は好況に転じた。

その傾向は都会から徐々に地方へ伝わり、北海道地区では秋を迎えた頃からはっきりした形になってあらわれた。それは雑穀類の商取引の増加にはじまり、物価の騰貴について青豌豆（あおえんどう）、菜豆（なまめ）が高値で商人に買いあさられた。

しかし、それは内地と交流のある地域にかぎられた現象で、交通機関もない僻地には及んでいなかった。

北海道北西部の天塩国苫前郡苫前村の山間部では新聞を眼にする機会などなく、人々は、漁村に出稼ぎに行った者の口からわずかに第一次世界大戦が続行中であることを耳にするだけで、経済の動きなどについては知ることもなく、関心もいだいていなかった。かれらは、山に入って炭を焼き、痩せた耕地を耕していた。

その年も、紅葉は天塩山地の高い峰々の頂きからはじまった。

朱の色は、早い速度で山火事のように尾根一帯を染め、互に合流して深くきざまれた渓谷へなだれ落ちていった。それは、谷間に鬱蒼としげる樹木の葉をあざやかに染めながら、所々に滝を作って曲折する渓流の流れとともに下ると、やがて三毛別川の支流に営まれた六線沢の村落をつつみ、さらに下流へと進んで海岸線にひろがっていった。

海は荒く潮流も早いが、点綴する漁村には家が密集し、太い材を惜しげなく使った網元の豪壮な家も立っている。漁村は、海の恵みをふんだんにあたえられていた。

春、鰊は潮流に乗って産卵のため海岸線一帯に重り合うような密度で押し寄せ、それを雄の鰊の大群が追ってくる。放たれる精液で海は白濁し、鰊の飛沫で水面が波立つ。雇われ漁夫をまじえた漁師たちは、舟を操って鰊ではちきれそうな網を休みなく揚げ、浜では女たちに老人、子供も加わって鰊を運ぶ。それらは、身欠きにされたり肥料用にされたりして、業者の手で買いとられてゆく。鰊漁の多寡が漁村の生活を左右したが、数年前から豊漁つづきで、漁村は活気にあふ

れていた。
それに比較して、六線沢の村落は、山間部の御料地に新しくひらかれた開拓地であるだけに、人々の生活は貧しかった。戸数はわずかに十五戸で、各戸の者たちは樹木を倒して根を掘り起し、岩石を取り除いて痩せた耕地に種をまいていた。
その地に人々が足をふみ入れたのは四年前の明治四十四年春で、北方三十キロの山間部にある開拓地から集団移動してきた者たちであった。
かれらは、東北地方の同じ村で父祖からの地を耕作してきた農夫たちであったが、水害につぐ水害で田畠を流され餓死寸前におちいった。農家では娘を売る者が続出したが、それでも飢えからのがれられぬ者たちは、政府の移民奨励政策にしたがって土地、家屋、墓石を捨て、家族とともに北海道の地をふんだ。
かれらは、指定された築別の近くの御料地に入植し、国からあたえられた僅かな奨励金で草囲いの小屋を建て、不毛の地に鍬を入れ、畝をおこして種をまいた。収穫は、故郷の地とは比べようもないほど乏しく、作物の種類も限られていたが、その地には少くとも定期的な河川の氾濫による濁水の襲来はなかった。耕した土は、そのまま越年し、まいた種も育った作物も流されることはなく、そのことだけでも、かれらは恵まれていると自らを慰めていた。
しかし、年を追うにつれて、かれらはその地の環境に不満をいだくようになった。それは、その地が種々な昆虫の大量棲息地であったからであった。
四月に村落をおおっていた雪が融けはじめるが、地表が露出した頃からアブ、蚊の発生がみら

れ、それは十一月初旬の初雪が舞う頃まで姿を消さない。殊に五月初旬から九月初旬にかけて繁殖がいちじるしく、人、馬、犬にむらがった。その激しさに、人々は、眼の部分に蚊帳布をたらした布袋を頭からかぶって耕作をしたが、馬はアブと蚊に体をおおわれて狂ったように暴れまわり、使用をしばしば断念しなければならなかった。

さらに夏季には、小さな糠蚊が大量発生し、あたり一帯が白くかすんだ。それらは、露出した皮膚に糠をまぶしたように附着し、人々は激しい痒痛におそわれ、中には高熱を発して苦しむ者もいた。また、口、鼻、耳孔に糠蚊が入りこんで、人々を卒倒させる事故すら起った。

かれらは、そうした苦痛にも堪えたが、五年前蝗の襲来によってその地を捨てた。

蝗害は、北海道の各地に周期的に起っていたが、その年の秋、かれらの村落におびただしい蝗の群が風に乗って飛来した。たちまち作物の葉や茎をかみ切る異様な音が耕地一帯にひろがり、それは原野の草地にも及んだ。

咀嚼音は昼夜の別なくつづき、三日後には作物も雑草も絶え、さらに草囲いの小屋の草壁や貯蔵された雑穀も食いつくされた。そして、蝗の群は再び風に乗っていずこともなく移動していった。

村落には、荒れた畠地、材のむき出しになった小屋、それらをおおう蝗の分泌した黒い粘液が残されただけであった。

かれらは、蝗の分泌物から発する異臭のひろがった地を放心したようにながめて立ちつくした。新しい土地の開墾を夢みて努力してきたかれらは、それが徒労に終ったことを知り、中には乏し

い身の廻り品を手に他の土地へ去ってゆく家族もいた。

村落が蝗害によって壊滅状態におちいったことは、その地区を管轄下におく帝室林野管理局員の耳に入り、対策が講じられた。その結果、その地を廃棄して新らたに六線沢御料地を農地に指定し、村落の者に移動するよう勧告した。

苛酷な環境に苦しんできた村落の者たちは、担当官の言葉にすぐには応じなかった。水害で故郷を捨て北海道に渡ってきたかれらは、入植地でなんの前ぶれもなく襲来した蝗の群にすべてを失った。自分たちをとりまく四季の移行は不安定で、それによって生活を侵蝕されるのは自分たちの定めかとさえ思った。かれらは、他の土地に移動しても、期待すべきものはなにもないと信じていた。

しかし、結局かれらは、担当官の勧告にしたがった。かれらにとって、官吏の存在は絶対的なものであり、その指示を無視することはできなかった。それに、差迫った問題としてかれらは生きねばならず、そのためには他の土地に移動しなければならなかった。

かれらは、指定された土地がどのような環境にあるかを知る必要を感じ、三名の男を選び、かれらを三十キロへだたった指定地に赴かせた。男たちは、三毛別の開拓村落を通過し、渓流沿いの道をたどって六線沢に足をふみ入れた。そして、担当官から渡された地図を手に附近一帯を踏査し、その地で野宿して村落に引返してきた。

かれらの報告は、村落の者たちの気持を動かした。六線沢には蚊やアブもほとんどいず、清澄な空気がただよっている。渓流沿いの御料地には平坦地が多く、耕地に適している。

殊に村落の者たちの関心を強くひいたのは、水量豊かな渓流の存在であった。それまでかれらが住みついていた土地は、水の縁に乏しく、丘陵を越えた谷から水運びすることを余儀なくされ、それが農作業の大きな障害になっていた。それに比べて六線沢では、労せずして畠に水を引入れることもできるし、飲料水に事欠くこともない。かれらには、その地が理想郷のようにも思えた。

村落全体の移住が決定し、移植希望者順にそれぞれ持分の土地が定められ、先発した男たちの手で家づくりがはじめられた。帝室林野管理局の許可を得て山林から材木が伐り出され、それを蔓で組み立て、周囲を草でかこんで樹皮の屋根をふいた。が、家と言っても出入口と窓に蓆を垂らし、床にイナキビ殻や笹を敷きつめた粗末な小舎にすぎなかった。

あわただしい移動がつづき、半年後には十五家族が六線沢に乏しい家財を運び入れた。

生活をはじめたかれらは、新しい土地の環境に満足した。夏になっても蚊やアブは少く、蝗が来襲する気配もない。それに家の近くを渓流が流れているので、溝を作るだけで水を畠の溜池にみたすことができたし、渓流の岸に設けた洗場で鍋釜を洗い、川魚をとって食うこともできた。

六線沢に移植してから四年余が経過し、人々はその地での生活にもなじんだが、両側に山肌の迫った僻地であるだけに自然環境はきびしかった。

六線沢は苫前村にぞくし、トド松、エゾ松の生い繁る山間部に孤立していた。村役場までは約三十キロの距離があって、村の中心部にわずかな日用品を買いに行くのにも泊りがけで行かねばならなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

冬がやってくると、その地は深い積雪に埋れ、きびしい寒気にさらされた。出入口や窓の蓆をひるがえして雪まじりの寒風が絶えず吹きこみ、鍋に残った雑炊は凍り、濡れた床には氷が張った。かれらは、昼も夜も炉の火をたやさず、夜間にはふとんの中で夫は妻と、子供は子供同士で互に身を寄せ合って眠った。防寒衣は、わずかに犬の毛皮で作ったチャンチャンコがある程度で、それも所持しているのは一部の者にかぎられていた。

そうした生活の中で、女たちは子供を生んだ。かれらは、家族がふえればそれだけ体温と呼気で家の中の温度がたかまると信じていたが、それによって貧困の度合は一層増した。

六線沢の者たちは紅葉の訪れに、積雪期がせまっていることを察し、あわただしく越冬の準備を急いでいた。山林から集めてきた木を割って薪を作り、雑穀、山菜、川魚を乾燥し、野菜を鰊とともに樽に漬けた。雪におおわれた冬期には、男たちの大半が漁場に出稼ぎに行き、村落には老人、女、子供たちだけになる。残された者たちは、食物を少量ずつ口にしながら、ひっそりと春の訪れを待つのだ。

紅葉が村落をつつんだ頃、すでに峰々の頂きは雪を冠していた。その白いかがやきは、紅葉の速度よりも早く山肌をおおうと、十一月初旬には六線沢一帯に初雪を舞わせた。

村落の者たちは、日増しにきびしくなる寒気と競い合うように薪を家の土間や庇の下に積み上げ、日没近くまで鉈をふるっていた。

気温がゆるんで霙まじりの雨が降る日もあったが、やがて牡丹雪が舞い、それも粉雪に変った。かれらは戸外に出ることもせず炉の近くで身を寄せ合ってすごしていた。

家々は、曲折した渓流ぞいに点在していたが、十一月下旬、下流に近い家で些細な動きがみられた。

その日、夜明けに近い頃、家人は、家の中に飼われている馬が突然足をふみ鳴らし、しきりに嘶(いなな)いて暴れる音に眼をさました。

主人がふとんからぬけ出し馬をしずめようとしたが、馬はおびえたように鼻孔を大きくひらき、たてがみを振り立てて荒々しくせまい空間を動きまわる。その異常な動作に、男は窓際に近づくと垂れ蓆の間から戸外をうかがったが、あたりは暗く、ただ渓流の水の走る音がきこえるだけであった。

かれは、しみ入るような寒さに身をふるわせ、火の消えかけた炉に薪を加えてふとんにもぐりこんだ。妻は、男の冷えた体に辟易して背を向け、かれは長い間歯を鳴らして体をちぢめていた。いつの間にか馬は落着きをとりもどしたらしく、あたりに静寂がもどっていた。

かれが仮睡して眼をさますと、すでに朝の陽光が垂れ蓆の間から流れこみ、家族は床をはなれ、前夜食べ残したヒエ粥(がゆ)の入っている鍋を自在鉤にかけて煮直していた。

かれは、起き上ると綿入れのチャンチャンコを着て炉の傍に坐った。なぜ馬が暴れたのか、おそらく狐でも家の近くを歩きまわったからにちがいない、とかれは思った。

かれは、家族たちと粥をすすった。家の中に煙がたちこめ、家族たちは眼をしきりにこすった。かれらの眼は充血し、そのふちからは脂(やに)がにじみ出ていた。

頭を木櫛(きぐし)でかきながら戸外に薪を取りに出ていった妻が、甲高い声をあげた。家族たちは顔を

あげ、男は出口に垂れた蓆をはね上げて外に出た。妻は、家の軒下に眼を向けていた。そこには、秋に収穫した越冬食糧用のトウキビが縄に吊されて干されていたが、その一部が荒々しく食い散らされ、縄も引きちぎられていた。

かれは、雪の表面にひどく大きな足跡が印され、それが裏山に消えているのを眼にして夜明けにやってきた獣が狐ではないことを知った。トウキビを食い縄をひきちぎっている荒々しい行為から考えて、羆（ひぐま）の所業にちがいないと思った。

羆は雑食動物で、植物性のものも食べあさるが肉も食う。時には家畜や人間を襲うこともあるが、かれは、トウキビを食いちらしただけで去った羆に身の危険を感じることはなかった。

六線沢は未開の山林中に位置し、そこに村落が形成されたのは、自然の秩序の中に人間が強引に闖入してきたことを意味する。当然、その地には古くから棲みついた鳥獣がいて、人間はそれら鳥獣との同居によって生活を営んでいる。羆にトウキビを食い荒されたことは、その家の家族にとって痛手ではあったが、それは、後住者である人間たちに課せられた宿命といえるものでもあった。

それに、男が羆の足跡にそれほどの恐怖を感じなかったのは、猟師から羆の習性を耳にしていたからであった。羆は、紅葉が終るころ餌をあさって十分な栄養を体に貯え、自らの体に適した穴を探し出して降雪と同時に冬ごもりに入る。すでに雪は来ていて、羆は穴の中に身をひそませているはずだし、家の外に近づいてきた羆は気紛れに穴から這い出て雪の中を歩きトウキビを食ったにちがいなかった。羆は決して飢えているのではなく、その証拠に馬を襲うこともしなかっ

たのだ、とかれは思った。
かれは、熊の出現も些細な事柄として軽視し、その小事件を他家にもらすことはしなかった。隣家までは遠く、それを告げに行く気にもなれなかったのだ。
しかし、五日後の早朝、かれは再び馬が足をふみならし嘶くのを耳にして落着きを失った。軒下に干されたトウキビの大半が食われ、新たな足跡が裏山の傾斜を駈け上っていた。
妊娠している妻は、トウキビが被害にあった分量だけ子供たちにあたえる食物が少くなると嘆き、クマに食わせるために収穫したのではないと、甲高い声をあげた。
男は、妻に辟易し、
「クマが勝手に食っていったものをどうすればいいというのだ。おれのせいだとでも言うのか」
と、怒声をあびせかけ、妻の頬を平手でたたいた。
しかし、妻は一層声を荒らげて、
「馬がクマにとられてもいいのか。クマは馬や牛や緬羊を好んで食うと言うじゃないか」
と、わめき散らした。
かれは、その言葉にひるんだ眼をした。耕作に不可欠の馬は家族にとって最も貴重な財産で、それを失うことは生活の破綻につながる。
かれは、二度も熊がやってきたことに不穏なものを感じ、下流方向の三毛別開拓村落に住む猟銃を持った老人に助力を得ようと思った。六線沢には、銃を所持している者は一人もいなかった。
かれが外出の準備をはじめると、妻は、

「クマを仕とめたら、私たちにも肉を分けてくれるんだろう？」
と、はずんだ声で言った。
かれは、無言でうなずくと、渓流沿いの雪道を下った。
三毛別の老人は、男の話をいぶかしそうにきいていたが、穴持たずかな、と脂のこびりついた眼をしばたたいた。
男は、初めて耳にする言葉に頭をかしげ、その意味を問うた。老人は、冬ごもりする穴を見つけそこなった羆のことだ、と言った。それは極めて稀なことだが、体の大きい羆がそれに適した穴を見出すことができず、降雪期を迎えてからも雪中に餌を求めて彷徨する。穴持たずの羆は、気性が荒いという。
老人は、炉端をはなれると、粉雪のちらつきはじめた戸外に出ていったが、すぐに銃を手にした中年の男を連れてもどってきた。そして、炉に鉄鍋をかけて鉛をとかし弾丸作りをはじめた。男は、かれらが雑談を交しながら器用に弾丸を作ってゆくのをながめていた。
老人と中年の男が、それぞれ村田銃を手に立ち上った。
男は、かれらを案内して六線沢に引返し、家の裏側にまわると食い荒されたトウキビと雪上の足跡をかれらに見せた。
老人は、足跡の大きさに眼をみはった。そして、中年の男と足跡の消えている裏山に探るような視線を向けた。
その日から、かれらは男の家に泊りこんで戸外の気配をうかがっていた。羆が餌のある場所に

繰返しやってくる習性を知っていたかれらは、羆が必ず家の近くに姿をあらわすとかたく信じているようだった。しかし、羆はそれきり姿をみせず、馬の嘶くこともなかった。

かれらの眼には倦んだ光がただようようになり、四日後、羆が遅れた冬ごもりに入ったのだろうと男に言い残して、銃を肩に三毛別へ帰っていった。

羆が男の家のトウキビを二度にわたって食い荒した話は、渓流沿いの家々にもつたえられた。が、それは村落の穏やかな空気をかき乱すこともなかった。むしろかれらは、羆を仕とめる機会をのがした三毛別の老人たちと肉を分けてもらうことのできなかった男の家族の不運を話題にしたにすぎなかった。

本格的な降雪期が訪れ、積雪が増した。羆の足跡はその後村落の附近でも眼にすることはなく、羆のことを口にする者もいなかった。

渓流が雪におおわれはじめた頃、村落では男たちの手で協同作業がはじめられていた。それは、厳冬期に漁場へ出稼ぎにゆく男たちに課せられた最後の仕事であった。

村落から三毛別方向へ赴くには、二キロメートル下流の本流に架けられた木橋を渡らねばならぬが、雪がその橋の通行を不可能にした。それを補うために、男たちは、冬期に北海道の各地で仮設される氷橋（ひがばし）と称される橋を村落と三毛別との境の渓流に架ける。まず丸太で橋の骨組みを整えてから枝を敷きつらねて、周囲を雪でかためる。雪はたちまち凍結して密度の濃い氷に化し、翌年の融雪期まで馬車の往来にも十分に堪える堅固な橋になる。その氷橋を架ける時期がやって

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com